

一闍提往生の本誓

第十八願に於ける「唯除五逆誹謗正法」に就ては振古の諸哲異解紛紜たるものがある。然し、学シテ一切法ヲ貫ス綜ス縷ス練スせし康僧鎧が翻訳なされた此の八個の文字その儘を、如来正覚の理念から最も純粹に素直に拝読するならば、それは、五逆と誹謗正法とを、唯、専ら、しっかりと、実除することを願す。即ち此の聖語は、三信一念によって一闍提がその罪体を断除せられて往生せしめられることを決定せるところの一闍提往生の本誓である。

除くのは、逆謗の罪であつて、逆謗の人ではない。一闍提の業を取り除いて、一闍提その人を往生させるといふのが唯除の誓語の意味である。従来、先哲が実除を怖れたのは、人が除かれると解釈せられるからである。然し、此の聖語に於ける唯除の目的・対象は罪体である。若しも罪人を目的・対象として漢訳するのであれば、僧鎧は「唯助五逆誹謗正法者」或は「即時攝取五逆誹謗正法者」等と表現なされたことであろう。

逆謗を実除するとは、徳として実除するのである。実除とは横超断である。横超断は切り花である。根を断ち切るのである。根を切られた活け花は、花は咲けども実はならぬ。横超断は六字の功德の断である。功德の断である故に切った儘が切っていない。断而不断である。完全に断じてはいるが、その果が頭れるのは目的の世界即ち極楽に於て

吉よし 水みづ 忠ただ 男おとこ

である。廻心しても即身に成仏しない。往生成仏である。一闍提の罪体は横超断にかかるけれども、不断煩惱の故に、一闍提の相は一生涯付き纏わせてある。娑婆の命のあらん限りは一闍提の儘で置いておかれるのである。然し、極楽へは煩惱具足で往生しない。逆誘の罪を持った儘で罪人が往生するのであれば、極楽は悪人共の阿鼻大地獄となるであらう。

此の、大経に於けるあらゆる經典に超越せる仏の本願の深理に就て、一般では平俗な喩を引いて、もしも公園に入らずらをする者が入らなければ、此の花を折るべからずという禁止の札を立てる必要はないのだが、悪人が公園の中へ入る故に斯る禁止の立札が置かれているように、第十八願にも、悪人が極楽へ往く故に、極楽へ往く者は悪事をすべからずという禁止の札が立てられている。それが唯除の誓文である、と見ようとするのである。また銘文三十一丁に「唯除は、ただのぞくということばなり。五逆のつみひとをきらひ、謗法のおもぎとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもぎことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すへしとしらせんとなり。」それは、本當に除くのではなく、ただのぞく。方便抑止。言うことを聞かぬからお菓子をやらぬと一応は言うが、後から御八つに与えるのだと論定するのである。然し、第十八願にそのような軽い方便の言葉が含まれているであらうか。罪の重きことを示して、とは注意書きである。唯除の聖語が然様な注意書きや公園の立札の如き程度のものであらうか。それでは、王本願は余りにも軽きに失するのである。般舟讚四丁に、

門門不同 八万四千 ハハニシテ ナリセシテガ 為滅三無明果業因 ナリセシテガ

利劍即是弥陀号 ハハニシテ ナリセシテガ 一声称念 罪皆除 スルニハ ナソコル

唯除とは専除であり、滅除であり、断除であり、頓絶であり、横超断である。横超断には撰取も抑止もかからないのである。それ故に、唯除の誓語に就て、抑止と撰取、仮除、暫除、二罪の共単、已造と未造、弥陀につくか釈迦に

つつか、等の論議は凡て付会の議論と見てもよいのである。信卷末四丁に、
言^ハ横超断四流^ニ者乃至言^ハ断者^ハ起^ス往相^ハ一心^ニ故無^シ生^ト而當^ル受生^ニ無^シ趣^ト而更^レ應^ル到趣^ニ已六趣四生因亡果滅
故即頓断^ニ絶^ス三有生^ト死^ト故曰^ク断也

と、親鸞聖人は深遠な解釈を述べられている。聞信一念に仏の願力を以て五惡趣に墮する罪業を横さまに超断する。罪業の体が超断せられている故に、逆謗の業相があつてもそれは生死の因種にならない。現実の生活の相には何等の変化も見出されないけれども、地獄の苦はもはや実体無き仮象に墮しているのである。六道の因が取り除かれる故に輪廻の果は自づから滅する。因果が已に亡ぶ故に身も名も頓に絶えることを経には無人と名付けているのである。我々は未来が我々をどのように導きつつあるかを見抜き、未来の攝取の必然性を自覚せねばならない。未来へ往く者に過去は無い。過去が完全に清算せられるのを横超断と名付けるのである。

横超とは、時間系列の堅性的性格を破壊し、理念の領域に解脱せしめることである。この絶対的直観の飛躍を信樂の一念という。それを、

夫按^ニ真実信樂^ニ信樂有^ニ一念^ニ一念^ト者^ハ斯^レ頓^ニ信樂開發^ト時尅^之極促^ト

と、絶対体験の極限を顯示せられている。斯様な瞬間的極限には如何なる人間性も人倫性も介入の余地は全く存しないのである。本典の如何なる場所に於ても倫理的法則が措定せられていないのは、本典が純粹宗教の理念を開顯するものであるからである。宗教的真理の倫理化を根源的に克服せる保証が教行信証の全体系の本質的な意味である。

樂邦文類云宗釈禪師云^ハ糞丹^ハ一粒^ハ變^レ鉄成^レ金^ト真理^ハ一言^ハ轉^レ惡業^ト成^ニ善業^ト（行卷四七丁）

阿闍世が如何に極悪を尽そうとも、如来正覚の理念に包摂せられ、仏陀の感化によってその根底を突き破られて、聖なる解脱の領域にまで意志が昇華せられた時には、已に犯した罪が大悲闡提の菩提心にまで転化せられるのである。

宗釈禪師の此の譬喩は鍊金術に似ているけれども、行巻に於ける大行の体系的な深釈は唯此の一句に尽るのである。神的理念は如何なる悪をも善化し得る絶対性を意味する。宗教に於ける真理のロゴスは、如来正覚の理念自体を意味すると同時に、それは仏行としてのターゲットであるからである。

涅槃經が一切衆生の仏性を認めながらも、一闍提墮地獄の義——蟻子を殺すも殺罪を得るが、一闍提を殺すとも罪を見ずという経語——は、涅槃經自体の矛盾であった。然るに涅槃經の全体が翻訳せられて、遂に、犯四重禁作五逆罪一闍提等皆有^ナ仏性^ニ（真仏土卷二四丁）の聖語によってその背反性の難過を完全に取り除いたのである。即ち、仏教がそれまで排除して来た一闍提の極悪の機の成仏が証明せられた。この意味で涅槃經は、善惡癈立の聖道一代の教えの不可欠の領域を肯定する經典となったのである。

今、淨土真宗で悪人正機を論じて、若しも此の涅槃經の体義が第十八願成就の中に見出されなければ、悪人正機の実義は妄想に墮するものである。然るに、涅槃經の中に大信心は仏性なりと論明されたその大信心自体は、第十八願に於て仏の方に成就せし仏心そのものであって、此の仏心を聞信の極促に無智の凡夫に廻向することによって、如来の仏性が悪人の性体に充満するのである。涅槃經は闍提仏性を論じて証の側の開頭となり、第十八願は十方衆生の機の上に仏性を成就し給う。即ち第十八願は涅槃經の体義である仏性を、信樂の一念によって眞実報土に於て具体的に開頭するのである。真仏土卷二九丁に、

故知^ム到^リニ安樂^ノ仏國^ニ即^チ必^ズ顯^ルニ仏性^ニ由^リ本願^ノ力^ニ回向^ス故^ニ亦^チ經^ニ言^フ下衆生^ハ未來^ニ具^ス足^ニ莊^ニ嚴^ニ清淨^ノ身^ニ而^テ得^ル見^ルニ^ハ仏性^ニ

涅槃經では涅槃の徳による破砕によって一闍提の現身成仏を要請しており、大經では仏の本願の功德の大益として、万善万行の総体である仏の正覚の名によって、無善の凡夫が涅槃の徳の領域にまで止揚せられるのである。涅槃經の優位性は闍提成仏にあるけれども、涅槃經の立場ではその成仏が現身成仏である故に、自証に於ける実践的困難性が

付き纏っている。然るに、大経に於ては、本典総序に欲^{ホクシテナリヤント} 恵^ニ逆^ニ誘^ニ闍^ニ提^ニと開頭せし如く、一闍提に南無阿弥陀仏の功德が充実すれば、その表面は一闍提その儘の相であるけれども、その本質は煩惱を断絶せる大涅槃の生活が徹底するのである。本願力の法は未来法である故に、現実の一闍提は此の未来法に引きずられて涅槃の都に入るといふ絶対宗教の最高極限の表示が教行信証であり、その証の具体的内容を取り扱ったのが涅槃經である。斯の涅槃經で取り扱われた法門を略門一法句すれば、易往而無人の五字の指標である。

善導の四帖の疏は、善人は仏道を得るも悪人は仏道を得ないという仏教一般の通義に泥んだ偏見を超えて、純粹宗教の上で、觀經の下三品から、悪人正機を革命的に論証したのであるが、其処には猶善惡廢立の余薫が残っているように見える。というのは、法を受ける機を限定して、謗法無信等は法を得るに由無き者として、朽林や大石には潤いを生ずる期が無いという譬喩を文義分七丁に引いているのである。然し、現身成仏の思想が草木国土皆悉成仏を論じているのは、むしろ、第十八願成就の眞實報土に於て絶対的に先証的な必然性を有っていることを看破しなければならぬのである。謗法無信に譬えられているその朽林頑石も報土に於ては七宝の樹林を意味し、八難の場所に於ける地獄餓鬼畜生も総て如来正覺の場所に作仏せしめられてゆくのである。報土は、世界の全体が成正覺している純粹莊嚴を意味するものである。然らば世界全体は如何にして如来正覺の中に超凡者として作仏せしめられるかは、

又其^ノ国^ノ微妙安樂 清淨 若^レ此^ノ何^ノ 不^ニ三^力力^ヲ 為^レ善^念三^道之^ノ自然^一 著^下 於^無二^上下^一洞^達無^常 辺^際上^宜下^各
勤^進 努力^自求^レ 之^必得^超絶^去 往^ニ生^安養^国一^横 截^ニ五^惡趣^惡趣^自然^閉昇^レ 道^無窮^極一^易 往^而
無^人 其^国不^ニ逆^違一^{自然}之^所 牽^何 不^下棄^ニ世^事一^勤行^求 道^德上^可下^獲 三^極 長^生 寿^樂 無^有 極^一 (大經

下十丁 願生菩薩橫超易往分)

と、若不生者の本願の成就を開頭している。もし唯善人のみの往生で第十八願の眞理が尽るとしたならば、此經語に

続く五悪段胎化段の開示を要しない。五悪段の対象は一闡提であって、一闡提が易往而無人の横超の直道によって直ちに報土に入ることとを顯示されたのである。玄義分の譬にある朽林も碩石も総て往生することを顕開せられたのである。

小西迦葉師云諸有衆生身中各有三百億方粒細胞一細胞中各有二阿弥陀仏一是故於一切世界無有闡提是以一切衆生体達弥陀正覺大世界

仏の法門は八万四千に余れども、八万四千の法門の終帰は眞実報土の往生即成仏の証の義に於て究竟するのである。易往而無人は、信を獲れば易く極楽へ往けるのだが人に信慧あること難ければ往く人無し、という難信の義に解釈せられている。然し、往き易いが往く人無しとは矛盾の論理である。弥陀は如何なる個体にも一々に南無阿弥陀仏の本願を成就し給う故に、往く人無しという否定的結語は存しないのである。

易往而無人の易往とは、南無阿弥陀仏によつて如何なる機も報土に直入し得るといふことであり、本願三信の易往の極限を意味する純粹原因である。無人は、易往に即する結果が成仏であることを顕す。無人の無は、虚無之身無極之体、即ち第十一願成就の無上涅槃の意味から見るべきである。此の往生は生即無生である故に、無人とは涅槃を証することであり、無上上の眞解脱の証徳を得た人である。これは眞諦の辺より見た無人であつて、信樂の辺より見れば無作の人である。即ち、易往而無人とは、本願力に値遇する瞬間に、唯除の本誓によつて人間のあらゆる与件から超越し解脱せしめられることを意味する。それは、易往にして而も直ちに成仏するという聞信一念即得往生の意味であつて、絶対未来の永劫性を瞬間に即する因果同時の極限を開示するものである。論註上六丁に、

問曰依何義說往生答曰於此間仮名人中修五念門一念念与後念作因穢土仮名人淨土仮名人不レ得決定
一不レ得決定異一前心後心亦復如是何以故若一則無因果二若異則非相統一是義觀一異二門

第十八願の真実なる信業に於て、現生正定聚という菩薩の位に住するが故に、娑婆に居りながら娑婆の如何なる条件にも支配せられぬから娑婆の仮名人であり、浄土に生れながら未だ浄土に居らぬから浄土の仮名人である。この仮象のままを背反性の絶対的統一に於て、親鸞聖人は何のことは無く九十才の生涯を自然に過されたのである。

大經に難信の証示があるけれども、その立場は積尊の出世本懐の場所から誓願一仏乗の絶対的価値を保証せるものであつて、これを弥陀招喚の願力的転換から見るならば、

如来興世易値易見 諸仏經道易得易聞菩薩勝法諸波羅蜜得聞 亦易遇善知識聞法能行此
亦為易若聞斯經信業受持 易中之易無過 此易是故本願修起法如是作如是説如是教応 當信順如法
修行

聖道の難行は行そのものが困難である。浄土の難信とは値遇の難であつて、自力の行を以て他力の信を獲ようとするから極難信の法となるのである。然し、此の値遇の難は機の方から言うのであつて、法の方から論定すれば行き易くして直ちに成仏するのである。寔に、易往而無人は他力の極意を示す。信すれば往生するという言い方をする為に、此の信の一字が呑み込めないで、何時までも疑情の雲に覆われたように見えるけれども、

観ニ仏本願力ニ遇無ニ空過者ニ能令速満足功德大宝海一 (浄土論二丁)

が、一心願生の内容を示している。即ち、値遇することが直ちに信である。仏力によって本願力に遇わせて頂くそれが直ちに廻向の信である。寔に、南無阿弥陀仏を聞く一念に往生の正因は究竟するのである。第十八願成就文に言く、
諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼国即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法一
仏を除いて如何なる者も一闍提に非ざる者はない。我々は一日として誹謗正法せぬ日は無い。然し、誹謗正法するとも邪魔にはならないのである。浄土論二丁に曰く、何等世界無一仏法功德宝一と。仏法功德の宝無きことを許さ

ぬ。誹謗正法。と言ふ以上、そこには已に誹謗せられる正法が存在する。誹謗する直下が最早、正法である。仏法である。寔に、仏法を信じようとも又誇ろうとも、仏から見れば同じである。一つである。

悪人正機とは、悪が理念の王国への契機となるという意味ではない。それは、人間が理念からの反映によって批判せられた領域であつて、人倫の場所に於ける善悪の措定を意味しない。若しも人間が人間自身の能力を以て善を為し遂げ得たとすれば、その善の為に却つて最高善を産み出す神的理念の道を閉塞するのである。悪人正機は、信前や初一念で言うべきものではなく、信後から翻つて自己の正機を自覚する状態である。弥陀の本願によつて助けられてみれば、自己の過去はどこまでも一闡提であつたという自覚が深まる。大経では唯除の本誓によつて、聞信の刹那に一闡提の禍根を断絶せられる故に、五悪段に来て自己の一闡提を自覚するのである。

浄土真宗に帰すれども

眞実の心はありかたし

虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし (悲歎讚)

これが大経の五悪段である。信を獲て後に出て来る。信を獲たからとて善人になりきることには無い。我々の日暮しが五悪段である。五悪段で往生するのである。五悪段に於ける深遠なる意味規定は、永遠に繰り展げられている人間運命の殃悪の領域即ち宿業の内観である。親鸞聖人は大悲の本願に任せきった生活を宿業にまで演繹なされたのである。大聖おのおのもろともに

凡愚底下のつみひとを

逆悪もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり (観経讀)

悲化段五惡段は如来正覺の智慧によって照顯せられた我々の姿である。この一闍提は永劫に救われないのではないかと問に対する答が、五惡段に続く靈山現土である。靈山現土の聖文は、誓願一仏乘の出拠であり、念仏は無碍の一道なりの根拠である。十方無碍人一道出_ニ生死_一。皆同一色は五乘齊入であり、皆同一色に包まれると現生正定聚である。一切光明皆悉隱蔽は、諸仏菩薩の光明さえも見えない。このような光りの中では、一闍提の如きものは黴菌の一つにも及ばず、顕微鏡で見ても見えない。唯見仏光明曜顯赫は、唯、撰取の光明のみ。これは一切衆生即得往生の益を顯す。一闍提が諸仏の仲間入りをして、弥陀の光明と一つになるのである。

光雲無碍如虚空

一切の有碍にさはりなし

光沢かふるぬものぞなき

難思議を歸命せよ (讚偈讀)

斯乃權化仁齊救_ニ濟苦惱群萌_一 世雄悲正欲_レ 惠_ニ逆謗闍提_一 故知 円融至徳嘉号 転_レ惡成_レ徳正智難信金剛信染除_レ
 疑獲_レ 証真理也 (本典総序)

人間が眞の宗教ヘタートするのは、その善からではない。又、最高善を為し遂げようとするが如き自己の限界を自覚しない偽善的な立場ではない。人間の現実は己に一闍提の悲劇の運命に陥っているのである。この一闍提性に対して、神になり得べく制約するものが、神的理念から直接に与えられた制約性である。それ故に、此の総序に開闡せる如く、世界史の上に有る聖者の意志は、一闍提の悲劇の運命の只中に在る者を直ちに無上覺の座へ止揚するのである。此の無制約の場所への解放が神的理念の絶対的真理である。

良仰^ニ師教^ヲ恩厚^ニ慶喜^ニ弥至^ニ至孝^ニ弥重^ニ因^レ茲^ニ鈔^ニ真宗^ノ註^ニ一 撫^ニ浄土^ノ要^ヲ唯念^ニ弘恩^ノ深^ニ一 不^レ恥^ニ人倫^ノ嘲^ニ若見^ニ聞^ス斯書^一者信
順^ヲ為^レ因^ト疑^ト謗^ヲ為^レ縁^ト信樂^ヲ彰^ニ於^ニ願力^ニ妙果^ヲ顯^ニ於^ニ安養^ニ安樂^集云^ニ採^ニ集^ニ真言^ノ助^ニ修^ニ往^ニ益^ニ何^ト者^レ欲^レ使^ニ前^ニ生^者導^レ後^ニ
後^ニ生^者訪^レ前^ニ連^ニ統^ニ無^ニ窮^ニ願^ニ不^ニ休^止為^レ尺^ニ無^ニ辺^ニ生^死海^ノ故^一爾^者未^レ代^ニ道^ノ俗^ノ可^ニ仰^ニ信^ス敬^ニ也^一可^レ知^ル如^ニ華^ノ嚴^ノ經^ノ偈^ニ云^ニ
若^レ有^下見^ニ菩^ノ薩^ノ修^ニ行^ニ一 種^ノ種^ノ行^ニ一 起^ニ善^ノ不^レ善^ノ心^ト菩^ノ薩^ノ皆^レ撰^取一 (化卷末四二丁)

信順を因と為し疑謗を縁と為して信樂を願力に彰し妙果を安養に顯さんという化巻の最後の此の言葉こそ、本典著作の究極の目的を開頭せられた最高なる結示の聖語である。信順為因は往相の大慈であり、逆謗為縁は還相の大悲である。信樂彰於願力は往相の究竟であり、妙果顯於安養は還相の始めである。

教行信証は、信謗の背反性を純粋に統一し、時間を超越して、あらゆる人格を如来正覚の御座にまで永遠的に秩序付けてゆくのである。宗教現象から見れば生死海は無辺際である。然し、宗教理性の絶対的推理から見れば、この無辺際の生死海を永遠に断絶し尽すことが最高のタートでなければならぬ。寔に、本典の此の聖語こそは、絶対的推理の真理を具体的に開頭する無限結語である。

あ と が き

昭和三十一年の秋、曾我量深師とのご縁により高円寺の浄雲寺に於て偶々小西迦葉師に遇い、其信仰と学問と体験に常ならぬものを感じた。希有の善知識に値い得たのである。爾来、遷化される迄別懇諄篤な慈導を蒙った。迦葉師は明治二十四年七月二十四日香川県丸亀市福島町に出生。倉本茂。十九才の秋、宿縁開發して、本願他力の真実の信心に遇う。二十一才より松島善海和上の膝下にて空華学徹を学ぶ。大正七年上京。難思寮、空華莊及び華園勸学院に於て親鸞聖人の思想及び宗教全般の哲学的研究を指導。親鸞様の如く賀古の沙弥教信の生活を理想として自由自在に

八十五年の信仰と学問の生涯を了えて飛ぶ鳥がその足跡を大空に残さない様に昭和五十二年三月十三日浄土へ還帰された。私達を弘願の本座へ躍入させる為に一生涯を非僧非俗の相で貫徹された還相の菩薩、小西迦葉師の出世は寔に二十世紀日本の驚異であると思う。

此の小論は、師説の一端を述べたもので、我^{レニカシキモノト}聞^ル如^レ是^ノである。唯、浅学非才の聞不具足のために師のご冥徳を汚さんことを只管慮れるのみである。諸賢の蔽密なるご批判と懇篤なるご善導を蒙りたく衷心より念願致すものである。

(完)